



大阪市の帆船「あこがれ」(362トン)が、中越大地震被災地支援のため寺泊港へ入港。被災地児童を対象にセイルトレーニングや船内公開、フルート演奏など町民と交流。



釣船は勿論、埠頭は家族づれの釣客で賑わっている。女性の太公望も最近が多い。お昼時はそれぞれ手持の弁当で一日のんびり楽しんでいる。



海水浴場は海の記念日の三連休から賑わいはじめている。野積、中央、金山、郷本、山田と寺泊には5つの海水浴場がある。(中央海水浴場)



月刊 第 588 号

港まつりへ

向って全開

七月一日降ったり晴れたりとはっきりしない天気の中で梅雨開き。
昨年の七・一三水害の災害の処理が終っていない状況の中で梅雨入りがはつきりしないまま

で何となく梅雨と言う天候、こんな年は梅雨のあがりもさっぱりしないのでびいだらしなければいいのだがと心配の声をきかれる海開きであったようだ。
六月二十八日二十九日と二日

間にわたり「ハマボウフウ」サミットが寺泊を会場に開催された。ハマボウフウサミットとは言うものの、海濱植物を育てて美しい浜辺を創ろうと言うボランティアグループの活動発表、意見交換の場で、近年珍味として特に業者によると見られる大がかりな盗掘により絶滅さえ危ぶまれているハマボウフウに焦点が当てられているもので今回は初日にセナミスミレ復元に取組んでいる村上の柴田治さんの発表がありその後地元で活動している能登洋一さんの案内で寺泊の海濱植物の観察、夜はハマボウフウの料理を味わう情報交換懇親会で大いに盛り上がったようである。ハマボウフウは単なる

食材としてだけではなく抗菌性、抗酸化性と言う特性があり解熱、鎮痛の薬効もあると言う秀れ物。
生で刺身のツマ、サラダ等又熱湯でさっとゆがいて酢の物おひたし、開いた葉は天ぷらにすると美味で、根の味噌漬は仲々の珍味、この根の盗掘で金山海岸では絶滅してしまっただけでなく、ただ驚いたことにきたねむろ山業エコランド事務局長の井芹靖彦さんの発表によると島での栽培は非常に簡単で充分な肥料を入れてやればほとんど何んな土でも発芽、成長も早く今後地産食品として大いに期待できるもので北海道では既に栽培出荷しているとのこと。商品として

出廻るようになれば盗掘の必要もないわけで盗掘を見張るより商品化してゆくことが先決と思われた。会場には農業関係の方々も参加しておられ海岸では今頃が丁度種の採取時期なので海岸への種まきと同時に栽培へも大いに期待し郷土料理としての研究も楽しみである。
七月五日ふっと港へ目をやると西埠頭にまさに忽然と三本マストの帆船の姿、大阪市の「あこがれ」である。
長岡市の児童と寺泊中学校の生徒が乗船トレーニング、又夜は美しくイルミネーション点灯フルート演奏会が行われ多くの町民が船内見学、八日の朝那羅へ向け多くの見送りの中出船し



公園内の緑蔭は絶好のバーベキューコーナー。
夜間のテントキャンプは公園内は禁止されているが、本格的な用具が揃い仲々のご馳走である。



朝早くから水上バイクをトレーラーに乗せた車が中央埠頭に集結。スロープブウェイから次々と海上へ乗り入れて行く。



ほたるへの関心が高まっている。ほたる舞う里が環境を計るバロメーターにもなっている。かつては寺泊でも川筋や田村にはたるは舞っていた。

て行った。
さて愈々寺泊の季節到来である。各海水浴場はそれぞれ趣向を凝らして已に準備万端みかりなく来客を待っている。道路は海の記念日の三連休から混み始め八月六日(土)寺泊サマーフェスティバル二〇〇五はゲストに島倉千代子、上杉香緒里、天領さとみ、司会に大倉修吾を迎えての歌謡ショーに寺泊太鼓、よさこい踊り、八木節公演、フラダンス、大民謡踊りと盛沢山。七日(日)の海上花火大会は七時半から打上げ開始九時終了予定で実施。広々とした海岸でゆっくりと、眼の前で豪快に炸裂する花火、海中高空の迫力を見物できるのは寺泊ならではのもの。土日と絶好の日程、ただ願

小説「寺泊」(2)

さとこのぶひと

うことは晴天となりますように。
水上勉は小説「寺泊」の冒頭部と終末部に、「海ねこ」を二回登場させています。
「風の中で啼いているのは、灰黒色の羽をひろげてむれとぶ、腹の白い海ねこだ」
寺泊の人が「カモメ」と呼んでいる海鳥のほとんどは「海ねこ」だそうです。生息地が天然記念物に指定されている海ねこは、カモメと比べれば判りやすいものを、水上は土地の人に聞いて確認したのでしょうか。しかし「カモメ」という響き

には、割軽さや穂やかさがまわりつき、猛り狂う冬の寺泊の海に似合いません。こは、強い吹雪に逆らって飛ぶ「海ねこ」でなければ。
国上山麓に住む高校教師のAさんが、土地の出版社から「良寛書簡集」を出しました。水上の分身である「ほく」はAさんに会って、良寛についていくつか取材したのち出雲崎に向かいます。かねてより「ほく」は、良寛が「附近の破れ堂に住んで乞食して歩いた道を歩いてみたかった」。「附近の破れ堂」とは郷本の空庵のことです。
「アスファルトの本道をゆくより、多少、道は悪いけれど、寺泊へ出て、海沿いの古道を出雲崎へ出た方がよいだろう」

と、運転手に回り道を頼みましたが、運転手もこんな大雪は予想していませんでした。国上から「アスファルトの本道」というと国道一六号線のことでしょう。三十年前、「海沿いの古道」は確かに悪路でした。「ほく」は、出雲崎や、国上山へは二、三どきでいるが、寺泊へきたのははじめてだった。ここには良寛の少時住んだ寺があった。地図によれば段丘の中腹あたりにはあつたが、いまは、そこへ歩をのぼす勇氣もなかった。
この「良寛の少時住んだ寺」とは照明寺、密蔵院のことです。国上のAさん宅で帰りしな、土産にと「ほく」は、奥さんから絹糸を放射状に巻いた手鞠を

もらいます。奥さんは、「ほく」の次女が重度の障害を負っていることを知っています。
「妻は、子が三歳の時に、自分の腰の骨をピース箱二つぐらい切り取って、子の骨盤部に移植した。ほくは、この費用を稼ぐ責任があったが、自分の骨を切ってやる勇氣はなかったのだ」
ここからの内省的な叙述は胸を打たれるものがあります。「ほく」は製材所の裏からの海の眺めにあきてきます。
「見るほどに町は丘陵にへばりついていて。こんな外岸になぜ町が成立したのだろう。漁業の便利さもある。が、良寛生家のある出雲崎にしても、ともにせばまった岸と丘陵のはさまにある。風に吹きよせられたよう



赤泊は已に佐渡市となり、寺泊は来年長岡市となる。
今年で56回となる両泊スポーツ大会である。
夜の交流パーティーも大切なイベント。



ハマボウフウ交流サミットが寺泊で開催。北海道、三陸、
湘南、村上、佐渡、寺泊と美しい海岸を育てる熱意が結
び合った。(現況発表する西山観光協会会長)



例年海の記念日に開催されるディナーショー。
今年では宝塚出身のシャンソン歌手 珠木美甫さんを迎えて
夏の一晩を楽しんだ。

に固まる町。日が荒海になぶられる町。ほくは、この町には波の音のしない日はないのだからと思ひながら南へ向った」とこの描写は見事です。表現の技巧に依存しないで核心をとらえています。

歩いていくと人だかりがして、それに向って、四十過ぎの女が五十近い男を背負って飛び出てきました。人寄せはカニ場でした。現在の位置で言うところ、ちょうど大町海岸の崖に近いあたりかと思われまふ。船から引き揚げられたばかりのカニを大釜でゆで、即売しています。三十年前、こういうことがあったかもしれません。「ほくは低く飛び出た粗末な店に、ゆ

が、戸板の上に無造作に山積みされています。むらがつた男女は、手籠を持って買いくるものもいますが、誰もがただ押し黙ってカニを食っています。「ほくは、不思議な驚きをおぼえ、立ち止ったまま、男女のただむしゃぶりつくカニの、手早い処理のしかたに眼をとられた。雪のふり込む野天で、息をこらしてカニを喰うさまは、これまでどこでも見たことのない、異様な光景である」小説「寺泊」を傑作に仕立てたのは、このカニを食う光景の凄まじさではないでしょうか。妻まじさで往來に飛び出した女もいます。「ほくは」この男女に興味を抱きます。女は「漁師の妻にしては色の白い

細面の都会風の顔立ち」で、近所の人家の主婦にちがひありません。男は病人で、不自由な身体であることがすぐ判ります。「女は色白だがいややに鼻が高」ととのいすぎた造作も気になつた」
当代、女を書かせたらこの人の右に出るものはいない、と言われた水上です。女の細かな動作一つひとつにエロティシズムが感じられて。
「ほくは女の表情と、男の表情とを、もう少しくわしく見たかった」
この一対の男女は、夫婦なのだろうか？ それとも親子なのだろうか？ このあたりの推量、もともと推理作家だけあつて巧みに読者を誘導していま

詩代御後援 (敬称略・順不同)	
東京都	東京部
竹内 瀧子	金五千元
納谷 トシ	金三千元
佐野喜久雄	金五千元
寺坂 一清	金三千元
札本 郡二	金五千元
外山 勝志	金五千元
小林六三郎	金五千元
渡辺 宏平	金五千元
新潟谷誠一郎	金一万元
東京都	東京部
小松 孝藏	金五千元
外山 浩章	金三千元
横濱市	横濱部
外山 喬嗣	金一万元
藤沢市	藤沢部
外山 勘次郎	金五千元
三島市	三島部
北澤 順治	金三千元
川口市	川口部
平石美和子	金三千元
千葉市	千葉部
五十嵐甲子男	金五千元
府中市	府中部
長部 仁	金五千元
相模原市	相模原部
三五 貞雄	金三千元
新潟市	新潟部
外山 和	金三千元
青柳 成一	金五千元
吉田町	吉田部
内藤 マツ	金三千元
生 福 寺	金五千元
寺泊町	寺泊部
渡辺電気商会	金三千元
若船二三生	金五千元
佐野 賢一	金三千元
岩野 庵	金五千元
平野 茂雄	金三千元
小黒 太郎	金三千元
丸山 トミ	金三千元

小波会七月句会詠草

兼題 夏至・緑蔭他当季

旅に来て

今日夏至とかや奥信濃

外山 海子

母の命日の

夏至の日輪われと在り

竹内 霍山

夏至の日や

ひねもす響く工事音

外山きよし

緑蔭に

居合はす訛り言葉かな

小形 美代

緑蔭や

佐渡つつぬけに屋根光る

内藤 蓮子



7月15日は大宮にある祇園神社のきょうり祭。といっても別に河童の祭りではない。かつてはきょうりが山と積まれたが、今は少し淋しい。



海岸にも次々と花が咲きついで仲々賑やかである。ハマボウフウの白とハマナデシコの赤の対比と思っただが、根の根の保護の為ハマボウフウは花を刈り取った後で残念。



寺泊に伝わる民話を残そうと写真のブックレットをふるさとだよりスタッフの小川隆さんが作製。学校や佐渡汽船ステーションに展示。

緑蔭に

一休みする車椅子

水沢 蕉子

あじさみの

花も溶かして夕まぐれ

小島 冬扇

雨蛙

岩に上りて安座せり

小島 温石

佐渡にゆく

ことこのよろこび夏帽子

加勢 辰竜

紫蘇の香のして

厨房の賑へる

中村 流瓢

都会より

もどり息つく青田風

江原 汀子

帆船の

風呼ぶマスト梅雨の空

大越碧水子

螢火や

人それぞれの想ひあり

能登 頑牛

あとがき

高速船の評判は上々で寺泊の人で佐渡へ行ったことがない人も結構沢山おいてになるようでも九時出港の便は仲々の混雑。佐渡でミニ観光をすませて五時帰港、半履き脱ぎと言う組も結構あるようだ。各町内、友達グループ、夏休み中は子供会の行事等も組み込まれているようだ。県内外からの引合いも多く観光バスが送迎する姿もよく見か

ける。ただ高速船ゆえの欠点もあるわけで波に弱いのである。減速すれば揺れは軽減できるのだがそれでは高速船の価値がないわけで船酔いし易い方はご安心。先日暑氣払いをかねて久々に編集会議を開き寺泊の方言のことやきょうり祭りのことが話題になった。きょうりには熱を鎮めるとともに体の乾きを潤す作用があり夏の食材としては最適。この祭りは本殿の左手にある祇園神社の祭りで特に花柳界の信仰を集めていた。若しかするとうりには男性のシンボルで山と積んで商売繁盛を祈ったのかも知れない。

り封じ」と言う病魔退散の祈願法要が七月二十一日と二十八日又右京区の五智山蓮華寺では七月二十七、二十八日に疫病をきうりに封じ込めると言う弘法大師に因む行事が行われると云うことである。暑中御自愛を。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代税共(百円)

編集人 中村 興樹
発行人 中村 興樹
発行所 新潟県寺泊町
ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二
ダイヤル局番 〇二五八七五
電話 二〇二九番
振替番号 〇六二〇一三三七四五

印刷所 吉野印刷株式会社